

## 「120年史の編集」に携わって

新 富 英 雄

2004年11月6日、東洋英和女学院は創立120周年を迎え、記念礼拝、記念式典等が盛大に執り行なわれた。1984年には学院の歴史のmilestoneとも言うべき創立100周年記念式典を挙行した。100周年から20年しか経っていないのに、120周年の記念式典や記念史の刊行などを企画する必要があるのかという声が多かったわけではない。しかし学校の歴史にとって重要なことは、時の流れの長短に依るものではない。この20年の間に、学院の歴史上どうしても触れなければならない二つの重要なでき事が生じている。一つは歴史と伝統を誇った東洋英和女学院短期大学が1998年に廃止となったこと、そしていま一つは1989年に新たに東洋英和女学院大学が開学したことである。

東洋英和女学院大学は「大学冬の時代」という厳しい状況下でも、着実に発展を遂げ、2004年6月13日には、横浜市パシフィコ横浜会議センターのメインホールを会場に、大学開学15周年記念行事を挙行した。在校生はもとより卒業生や旧教職員など多数の参加者を迎え、多彩なプログラムが計画され、大学満15才の誕生を祝した。続いて2004年11月6日には、東洋英和女学院創立120周年記念式典が開催された。1884年創立の学院が120年の歴史を刻んだことは慶賀に堪えない。

この120周年の記念日には、同窓会による村岡花子展、学院の歴史と各部の現状を伝える展示イベント、更には中高生によるバレーボール公開練習や大学生によるチアリーダーの模範演技などスポーツイベントも催された。また、「東洋英和と私一建学の精神とこれからの東洋英和」という課題で懸賞論文を募った。これらの詳細は『楓園』(39号)に譲ることにしてここでは次の二点にだけ触れることにする。船本弘毅院長の

「主の導きの中で」という記念礼拝説教の後、ロバート・ライト カナダ大使等が祝辞を述べられた。また、宣教師のロジャース先生・ブラウン先生・ニノミヤ先生・ジュティン先生方が国内外からホームカミングされ、それぞれがこの日を祝福された。あたかも20年前にタイムスリップした思いをされた出席者も多かったのではないかと思う。

また、この記念日には120年の歴史をなぞるページェント「光に生きて120年」が、構成・演出松岡勸子氏の指揮の下に催され、大勢の出席者の注目を浴びた。東洋英和女学院の素晴らしさを再確認したのは、このページェントの中で織りなされる時代・時代に即応した役を演じきる、幼稚園児から上は大学生や卒業生に至る素人役者たちの健気に演じる姿であった。舞台の一举手一投足が多くの観衆の心の中に、しっかりと刻み込まれたことであろう。

創立120周年記念式典の種々の催し物が成功裡に終わったのも、何度となく開催された「120周年記念事業委員会」の方々の努力の賜物であったことは言うまでもない。一方、2004年11月6日の完成を目指し編集作業に心血を注いできた「120年史編纂委員会」がある。残念ながら創立記念日に発刊の夢は果たせなかったが、2005年3月には刊行予定である。次にこの編纂委員会について述べておきたい。

「120年史編纂委員会」が始動したのは4年前の2000年5月のことである。委員会設立の契機は1999年度史料室委員会(委員長、清野禮中支部長)からの提案であった。『120年史』刊行の主旨を、「第一にはこの20年間の、大学・大学院開設、短期大学閉学・中高校校舎改築、パイプオルガン設置、生涯学習センター創設、小学部校舎改築、本部・大学院棟の建築などを行なった

構想と設立や建築に伴う歴史的意義と資料の収録をすること。第二にはこれからの学院が建学の精神を保ちつつ、新しい21世紀に求められる教育を行なうための基礎をつくる時期の歴史を記録することの二点ではないかと思われます」としている。また、『百年史』が工藤英一明治学院大学教授と塩入隆国立長野工業高等専門学校教授を主軸とした、外部の方を中心に執筆されたのに対し、『120年史』は、学院内部、編纂委員会を中心に執筆したこと、それに歴史叙述のみではなくエッセイ・資料・年表の充実をはかったことが特徴である。

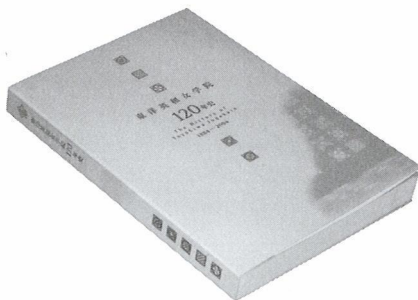
この委員会は大学の人間科学部部长川島貞雄を委員長に、東洋英和幼稚園園長 大伴栄子、小学部教頭 上村稔、中学部部长 佐藤順子のほか、大学からは国際社会科学部より目黒士門・杉山和雄、人間科学部より原島正それに筆者 新富英雄の4名、それに史料室からは鳥居美子・谷川祐子のちに保坂綾子が編纂委員として参画した。

「120年史編纂委員会」が発足した当初は、目指す完成年2004年の創立記念日まではまだ余裕があると思われたが、実際実務に入るとこの作業はそれほど容易なことではないことに気づいた。初めのおよそ2年間は方針・構成・本の体裁・執筆分担等を定めることを軸に、資料部会・年表部会を作り、活動を始めた。私が担当したのは年表で、1年365日の120倍という創立からの長い歴史に生じた事件や出来事に目を通し、本学院の歴史に刻むべき主要な事件を抽出し、英和との関わり方の比重を考慮しながら意見を交わし取捨選択するという作業行程は、気が遠くなるほど苦痛なことであった。もちろん「本は本から作られる」という格言も忠実に聞き入れ、過去に先輩たちが苦勞された数々の年史、

近くは『東洋英和女学院100年史』『目でみる東洋英和女学院の110年』があり、その恩恵に浴したことは言をまたないが、その中に編まれた年表を、それをそのまま借用するだけでなく、委員が一項一項に目を通し、誤謬を修正したりその事実の軽重を議論し、その結果取捨選択を行なうといういわゆる年表の洗い直しの作業を行なった。六本木校舎あるいは大学校舎で何回やったであろう。厳しく辛い仕事であった。時間不足が話題となりそれを補うために、2003年の春休みには天城山荘そして夏休みには修善寺のラ・フォーレに足を運び、2度も年表作成合宿を行った。鬼軍曹谷川祐子委員の指揮の下にハードなスケジュールが組まれ缶詰状態で作成に取り組み成果を得たが、これも今では楽しい思い出である。

2001年3月には、杉山委員・鳥居委員が、2004年3月には川島委員長・目黒委員が退職され委員を退かれた。幸いなことに目黒委員は完成するまで編集作業に携わることとなった。2004年度 新しい年度を迎え、船本弘毅院長が新しく編纂委員長となり、総指揮を取ることになった。従来の編集作業を一部軌道修正し、そのため上梓の時期も2005年3月に延期することを余儀なくされた。2名の退任後も委員の補充はなく船本委員長の下、委員は完成を目指し作業に没頭した。幼・小・中高部の原稿書きはある程度順調に進んでいたが、短大・大学の部の原稿は多少遅れをとっていた。今回の120年史は当然のことながらその焦点を100年後の20年間に置いていることは承知しながらも、この作業はそれほど容易ではなかった。それは大学は歴史を「始める」作業であり、短期大学は歴史を「終える」作業で、その根底に流れる事件や事実をど

う捉え、どう記述するかが大きい壁となっていたことによる。遅れがちの大学・短大の原稿を検討する意味もあり、船本委員長の指示の下で大学・短大部編纂委員の目黒、新富、それに谷川、保坂の5名が2004年の夏休みに修善寺のラ・フォーレで、食事の時



間以外はほとんど作業に没頭するという苦しい三日間を過ごしたが、その苦しみがよき結果を産み、どうにか先に光が見えてきた合宿であった。

前途洋々と展開する大学の歴史に比べると、終焉を迎える短期大学の歴史はペンの進みが決して同じにはいかない。その背景には、どうして短期大学を発展的に四年制大学にしなかったのか、あるいは大学の方から「短大の英文科と国際教養科で大学に一学科を作ってはどうか」という提案を受けながら、それが実現しなかったのは何故か、といったもろもろの不可解な点が潜んでいることがその大きな要因である。その不可解が新たな解釈を得る時もやがては来るのであろうか。

歴史を物語るということは過去を振り返ることによって未来を切り開くことである。この先、仮に150年史、200年史が編纂される時、短期大学の終焉がどのように語られるかは、史実の主観的な解釈ではなく客観的な事実を待つほかないであらう。

『120年史』の編纂を終えて、今後、学院および史料室がどうあるべきかについて、多くを考えさせられた。この編集に携わって学んだことも多々あったが、それよりも苦労というかもどかしさを多く経験した。歴史を記述する時に大事なことは、事実には忠実であろうとする姿勢である。その事実を求めて東奔西走し、資料を入手することが編纂の第一歩であり編集作業に携わる者の使命である。しかし執筆に際し、短期大学に関する資料が、短大廃止後まだ4・5年ほどの年月しか経ていないのに、すでに散逸あるいは紛失している事実と直面した。一体これはどうしたことかと憤りすら感じた。短期大学全盛の時代には、史料室に相当する場所はなかったけれども、図書館員が行事があるとその都度、資料を収集し必要な写真を撮って、保管する業務もこなしていた。しかし短期大学が大学の傘下に入って以降はその役割も違ってしまったのか、うやむやな状況である。大学も同様の現象があったようである。一番頼りにすべき六本木の史料室にも短大・大学からの資料が移管されてなく、入手できない資料もいくつかあっ

た。また、恥ずかしい話であるが、「100周年記念行事」に関する写真がすべて、紛失してしまっている。100年前の写真より、この20年間の写真のほうが、入手困難であった。当然あるべき史料や資料の管理が各部とも十分でないので、学院の史料室を中心に史料・資料がきちんと集まり、管理・保管される体制を早急にする必要性を痛感した。大学もまだわずか15年余の歴史だからという安易さは禁物である。史料・資料に詳細に気を配り、今から迎える50年史や100年史が滞りなく編纂されることを願ってやまない。上述の苦い経験から史料室のより一層の充実を図りたいというのが、委員会の願いである。

学院が大きくなり、また六本木と横浜の2つの校地がある現実の中で、東洋英和女学院に連なる各人が、学院の建学の精神をはじめとする過去の歴史をきちんと認識し教育にあたるのが史料室の役割である。現史料室の谷川・保坂両氏は今学院にとって最高最良の担い手である。このお二人の卓見と努力奮闘がこの学院の歴史(史)料を豊かなものにしてくれることは請け合いである。昨年2004年4月に学院史料室は遅まきながら全国大学史資料協議会に入会し、研究会等に出席し、研鑽を積み、かつ他校の史(資)料室や年史編纂室と連携を深めつつある。

今後、『史料室だより』の更なる充実をはかり、3号まで刊行し途絶えている資料集の発行、開かれた資料であるべくデータ・ベースの作成と今後の課題は多くある。また史料室委員会、大学運営委員会等で真剣に討議していただき、横浜校地の方にも史料室の分室を一刻も早く設置していただきたいと念じている。

(大学教授・史料室委員会委員長)

## 〈思い出の先生がた〉9

### 短期大学最後の学長としての福田垂穂先生

大 嶋 恭 二

1991年の秋、東洋英和女学院短期大学の次期学長にお願いするために、学長候補者選考委員会委員長の芝恭子先生と明治学院大学の福田先生の研究室にお訪ねしました。そのときの先生は明治学院大学での定年を1年後に控えておられる時期で、私どものお願いに正直言ってびっくりなさっておられたことを今まざまざと思い出しています。先生は、当時東京都の児童福祉審議会の委員長をなさるなど、児童の福祉には造詣が深く、私自身、以前から研究等のことで大変お世話になっていたり、また私に東洋英和女学院短期大学に入る道を開いてくださった方でもあったことから、「同僚の芝先生と伺わせて頂きたい」と言うお願いをしたときには、先生は研究、あるいは研究助成のことで私たちが訪ねるものと思っていまして、学長の件を切り出した時にはとても驚いておられました。結果的には1年待ってもらえれば就任を承諾するというお返事を頂き、教授会も満場一致で1年お待ちして学長に迎えることを決定しました。その時の心境を先生は、1993年4月1日発行の「東洋英和女学院短大だより」で、明治学院大学を定年で退いた後は、書齋に籠もる時間を大事にしたいと考えて、いくつかの大学からあった誘いをお断りされていらしたそうですが、「しかし、考えてもいなかった東洋英和からのお招きは、喜びを伴うショックにも似た天啓であり、祈りをもってお答えすべき召命でもありました。」と書いておられます。先生は熱心なクリスチャンであり、東洋英和の110年の歴史とそれまでに果たしてきた業績をよくご存じでした。私どもにとっては待望の学長を迎えることができ、その喜びは筆舌に尽くせないほどでした。

しかし先生が就任された頃から、短期大学は、将来的には4年制の大学にするという方向であり、激動の時期を迎えることになりました。一方ですでに1989年より同じ横浜キャンパス内に4年制大学ができていたこともあって、短期大学の4年制への実現に向けて大変な苦労をされることになりました。短期大学の教職員の地位や身分、学生の母校への愛着と同窓の方々の短期大学

に対する思いなどを一身に背負いながらの4年間であったと思います。大学側との話し合いが始まってからは、私も当時の保育科の科長として、福田先生と一緒に大学側との話し合いに同席させて頂きましたが、先生の責任感の強さと、教員、学生への深い思いが切々と伝わってきたことをつい昨日のこのように思い出しています。福田先生は短期大学の4年制への道筋をつけられて1997年3月をもって東洋英和女学院を退かれましたが、退かれた後も、私たち教員一人一人のことを心にかけて下さり、幾度かお会いし話をさせて頂いたり、励ましの手紙を頂いたりしました。2002年6月、西東京市の教会の礼拝で説教をしておられる最中、突然意識を失われご逝去なさいました。信じられない思いでした。福田先生が会う度に「やあ」と声をかけて下さったことがつい昨日のこのようです。今、あらためてご冥福をお祈りいたします。  
(大学教授)



#### 福田垂穂先生略歴

- |            |                           |
|------------|---------------------------|
| 1924年      | 京城(現ソウル市)に生まれる            |
| 1950年      | 日本社会事業専門学校研究科卒業           |
| 1952年      | 明治学院大学文経学部社会学科卒業          |
| 1954年      | アメリカ・ベッセル大学毕业             |
| 1956年      | アメリカ・ハートフォード大学神学校大学院終了    |
| 1957年      | 明治学院大学講師(69年教授)           |
| 1985年      | アメリカ・ホープ大学名誉人文学博士         |
| 1993年      | 明治学院大学退任、この間社会学部長、副学長など歴任 |
| 1993年      | 東洋英和女学院短期大学学長             |
| 1997年      | 東洋英和女学院退任                 |
| 2002年6月16日 | 逝去(享年77歳)                 |

## 〈資料紹介〉 7 年史 (1)

### 『東洋英和女学校五十年史』

島 創 平



はじめに

東洋英和女学院は、その120年に及ぶ歴史の節々において、その歴史を振り返り、栄光ある伝統を後世に伝えるために、年史、記念誌や資料集、写真集、年史などを刊行してきた。今まで発刊された「年史」のうち、ページ数が多いのは『五十年史』(1934年発刊)、『七十年誌』(1954年発刊)、『百年史』(1984年発刊)の3冊である。このうち、最もページ数が多いのが『百年史』(705ページ)であるが、『五十年史』(380ページ)は、それに次ぐ厚さである。また『五十年史』は、学校創立後最初の本格的年史である。そこで今回は、この『五十年史』を中心に紹介したい。

明治以後の日本の歴史は、第二次大戦を境に大きく変質するが、東洋英和も同様に、戦前と戦後では大きな変化が見られる。それゆえ『五十年史』は、戦前の東洋英和の姿を伝える貴重な資料である。特に戦前の東洋英和の歴史は、決して平坦なものではなく、キリスト教系の女子教育校として、様々な試練に遭遇した。その最大の試練は、言うまでもなく第二次大戦中であつたが、キリスト教主義の学校としての英和の試練は、それ以前から度々見られる。『五十年史』は、こうした「試練」をどのように伝えていくだろうか。

#### 創成期の英和の試練

1884年、カートメルにより創設された東洋英和女学校は、最初は2名の生徒から始められたが、その後急速に生徒が増え、校舎も度々増築された。『五十年史』はただその事実を伝えるだけであるが、『百年史』には、こうした順調な滑り出しの背景として、当時の日本がいわゆる「鹿鳴館」(1883年竣工)に象徴される「欧化政策」の時代であり、特に上流家庭において、英語教育と欧米的風習の習得が重んじられたことが挙げられている。こうした皮相な「親欧米」の風潮は、英和の本来の方針であるキリスト教教育と

は必ずしも相容れるものではなく、間もなくその反動期を迎えることになる。1890年当時の校長ラーズ夫人とその夫の殺傷事件後、生徒数は減少する。これについて『五十年史』は、当時「我が国社会の大勢は、漸く反動主義の時代に遷移し、所在のミッション・スクールは何れもその影響を免るる能わざるに至った」と述べているが、1891年の内村鑑三の「不敬事件」など、この頃は国家主義の台頭と共に、キリスト教への風当たりが強まった時期でもあつた。

次の英和の試練は、1890年以来4度、8年にわたって校長を務め、「英和伝統教育の宗家」と目されたブラックモアの時代に起こつた。すなわち1899年、学校における宗教教育と宗教儀式を禁止した文部省訓令12号の公布である。これに関しては、『五十年史』はほとんど触れていないが、『百年史』によると、この訓令によりキリスト教の立場を保持する学校は、文部省の認可を受けられず、各種学校と見なされるという不利益が生じた。しかしブラックモアは、敢えて建学の精神であるキリスト教主義を堅持する道を選んだのである。同年、ブラックモアは高等科を開設し、各種学校扱いにより生じた上級学校進学資格に関する不利益を解決した。この高等科は、後に1918年、やはりブラックモアの尽力により、いくつかの女子ミッション・スクールの高等科を合併して創立された東京女子大に編入された。

このようにブラックモアは、東洋英和のみならず、日本の女子教育の発展のために大いに貢献した。『五十年史』の中で、彼女について語られている文章は、群を抜いて多い。授業でも、生徒の普段の振舞いに対しても、常に厳しく、しばしば生徒に罰を科したようであるが、それでも生徒からは慕われ、尊敬されていた様子が、教え子達の回想録の行間から窺える。

また、これらの回想録を読んでいると、当時の東洋英和の生徒達はなかなか活発だったようである。名門のミッション・スクールの女学生というと、何か淑やかな「お嬢様」といったイメージが想起されるが、回想録の初めの方には、明治19年頃の話として、校庭の無花果の木に登

って落ちてしまった生徒時代の思い出が載せられている。また寄宿舎に侵入した泥棒と格闘した高等科生時代の武勇談もあり、さすがに厳しい教育と躰に鍛えられた当時の英和生は、一筋縄ではいかない、積極的なたくましい一面も持っているのだと、改めて感心させられた。こうした当時の英和生の積極性が、矯風会や少年禁酒軍、王女会や社会事業など、学生達のさまざまな自主的活動を盛んにしていったのであろう。

### 英和の教育方針

村岡花子の随筆「昔の先生たち」によると、当時の英和では英学科と日本学が、並行して教えられたということである。このように、東洋英和はカナダ人により開かれた学校であるにもかかわらず、単に英語だけでなく、日本の伝統的教養も重んじられた。『五十年史』によると、こうした教育方針は、早くも2代目の校長ラージの時代から始まるように思われる。先に述べたように、ラージ校長の時代はいわゆる「鹿鳴館」の時代で、軽薄な欧化主義の横行した頃であったが、ラージはこうした風潮に対して、「適切な西洋の長所」の取り入れと共に、日本人の「固有な美点」をあくまでも保持すべきであるという立場から、日本の伝統的文化的価値も十分認識していた。一例を挙げると、英和は早くから音楽教育に熱心であったが、ラージは当時教えられていたピアノと共に、箏曲の教育も導入し、これは震災前まで続いた。幕末期から明治初期に日本を訪れた欧米人の記録を見ると、彼等にとって日本の音楽は良く理解できなかったようで、例えば、幕末期に日本を訪れたエメュ・アンペールというスイス人は、「日本の音曲は何か奇妙で、ヨーロッパ人の耳にはどうもびんと来ない。音曲の基礎となっている音楽のシステムが、まだ不明である。日本の音楽は半調子のものが多く、しばしば同じような言葉を繰り返しながら、長音調から短音調に移り、最後は全く調子になっていない。従って、日本の音楽芸術は、我々が西欧において知っているものとは、決定的に合致したところがない。」と述べている（『絵で見る幕末日本』より）。このように、未だ欧米人の日本文化理解があまり進んでいない当時あって、日本の伝統文化的価値を認め、英語と共に日本の文化理解を早くから教育方針に取り入れたラージの先見性は、高く評価されるべきであると思う。

### 東洋英和と信州

いささか個人的な話で恐縮だが、私の父は信州小諸の出身で、その姉（つまり私の伯母）は、昭和初期に東洋英和の幼稚園師範科を卒業している。こうした事情から、私は特に、東洋英和と信州との関係という問題に関心を持っていた。

英和と信州の関係は、言うまでもなく1905年に設立され、1919年に英和に移転された上田の保姆伝習所から始まるが、そもそもなぜ上田にこうした施設が作られたのか。その背景には、カナダ・メソジスト教会による信州伝道活動があると思われる。当時特にこの活動の中心となったのが、1897年に来日し、1902年から1934年まで信州で伝道活動に当たったダニエル・ノルマン（ノーマン）であった（因みにダニエルの次男は、優れた日本史研究家かつ有能な外交官で、マッカーサーの日本占領政策にも大きな影響を与え、後にマッカーシズムの犠牲となって、エジプトのカイロで自殺したハーバート・ノーマンである）。長野県内の東北信のプロテスタント教会の多くは、ダニエルの精力的な援助活動によって建てられたものである（再び個人的な話になるが、父は幼い時、「ノルマンさん」によって洗礼を受けている）。

こうした事情から、上田の保姆伝習所、さらには東洋英和と信州は、カナダ・メソジスト教会の活動という点で接点を持つ。特にダニエル・ノルマンと東洋英和の何らかの関係が確かめられないだろうかと思い、『五十年史』を辿っていくと、1923年関東大震災後、幼稚園師範科を一時長野市に移すことになり、学生達の勉強先として「ノルマン氏夫妻が帰国中であったので、男子ミッションでは快くその家屋の使用を許可して下された」という記述が見つかり、間接的とはいえ、ノルマンと東洋英和の関係が確かめられて、興味深く感じられた（なお、ダニエル・ノルマンの信州での活動に関しては、中野利子『外交官E・H・ノーマン その栄光と屈辱の日々1909-1957』（新潮文庫、2001年）の中で述べられている）。

（大学教授・史料室委員）



## 村岡花子関係資料（２）－東洋英和女学院刊行物より

### 〔村岡花子執筆一覧〕

タイトル	掲載誌	発行	備考
雑記帳より	創立三十五年祝賀記念 『同窓会々報』	1919.12	
サファイアの貴婦人	『同窓会々報』(昭和2年度)		創作
編輯のあと	『同窓会々報』(昭和2年度)		
風と鳥と電線	『同窓会々報』(昭和4年度)	1929.12.27	童話
編輯のあと	『同窓会々報』(昭和4年度)	1929.12.27	
街上小景	『同窓会々報』(昭和6年度)	1931.12.20	少女・きつね
編輯後記	『同窓会々報』(昭和6年度)	1931.12.20	
薔薇（ダンセニイ）	『同窓会々報』(昭和8年度)	1933.12.28	翻訳
私の手紙	『同窓会々報』(昭和8年度)	1933.12.28	
編輯室より	母校創立五十年記念号 『同窓会々報』(昭和9年度)	1935.3.25	
編輯者の言葉	『同窓会々報』(昭和10年度)	1936.2.17	
この頃の感想	『同窓会々報』(昭和11年度)	1937.3.31	
世界教育會議風景	『同窓会々報』(昭和12・13年度)	1938.7.10	
編輯後記	『同窓会々報』(昭和12・13年度)	1938.7.10	
日記抄	『同窓会々報』(昭和14年度)	1941.4.25	
矯風会と少年禁酒軍	『東洋英和女学校五十年史』	1934.12.9	
編集後記	『東洋英和女学校五十年史』	1934.12.9	
古い卒業生のこと	母校創立七十周年記念 『東光会々報』		片山広子さんについて
身辺雑記	『東光』創刊号	1955.12.25	生活の流れ・歴史をつくるもの・「光塩会」
昔がたり	『楓』七十周年記念号	1954.11.6	
忘れ得ぬ人々	『東光』第3号	1957.12.25	ミス・アリス・ストロザード、片山広子さんについてなど
学窓を巣立つ人々へ	『楓』復刊第1号	1957.3.15	
灰色の家	『東光』No2	1962.4	
隨筆 古本屋・六本木・「赤毛のアン」	『東光』創立八十周年記念号	1964.11.7	
塩原千代氏を語る	『東光』No4	1965.12	
自画像	『東光』No5	1966.12	塩原千代「村岡花子さん」に追加の形で執筆
旅の日記から	『東光』No6	1967.12	
遺稿集「いきるということ」より	『東光』No8	1970.4	麻布鳥居坂・日光の町・赤毛のアン

\*村岡花子：『同窓会々報』編集者（昭和2～15年度）、『東洋英和女学校五十年史』編纂委員

### 〔座談会記録〕

タイトル	掲載誌	発行	備考
〔座談会〕 なつかしいガス灯のむこう－寄宿生活を中心に	『東光』創立八十周年記念号	1964.11.6	出席者－ 塩原千代、小畑とり、林つる子、村岡花子、 大堀しげ子、吉本てう子、新井たけ子

### 〔村岡花子に関する主な記事〕

タイトル	掲載誌	発行	備考
英和の教育は素晴らしい－村岡花子先生－	『東洋英和新聞』第86号	1963.10.3	連載企画“Bonjour”
村岡花ちゃんと私	『東光』No7	1969.3	執筆－河上末子
村岡花子先生訪問記	『はぐくみ』第4号	1969.5.3	はぐくみ編集部
うけつがれる心	『母の会だより』第48号	1982.3.3	執筆－村岡みどり
はじめての「赤毛のアン」	『敬和会』52号	1990.3	執筆－村岡みどり
故村岡花子さん邸を訪ねて	『楓園』第14号	1993.11.5	執筆－道家純
戦時中に立てた友情の証 ～『赤毛のアン』翻訳逸話～	『楓園』第33号	2003.5.30	執筆－村岡恵理
村岡花子と東洋英和	『史料室だより』No63	2004.11.6	執筆－村岡恵理

## 2004年度 史料室報告

- 4月・大学3年生(5名;「保育ヒストリー」選択者)と幼稚園の写真アルバムの整理を始める。(～8月)
- ・大学教員3名来室。カナダミッシヨンの幼児教育に関する研究のため、資料閲覧。
- 5月・清水由松氏について、ご子孫より問合せあり。
- ・史料室2名、全国大学史資料協議会東日本部会総会出席、慶応義塾福澤センター展示室見学。
  - ・史料室2名、自由学園資料室見学。
- 6月・宣教師ミーチャム、イビーについて、問合せあり。
- ・東光会へ写真2点提供。『東光』41号掲載のため。
- 7月・ミス・カートメル使用の聖書および北原白秋の直筆原稿の写真撮影。その後、両資料の保管場所を高等部部長室耐火金庫から法人事務局長室耐火金庫へ移動(暫定)。
- ・生涯学習センター講座「東洋英和の女性たち」の受講者十数名、史料室見学。
  - ・120周年記念事業(展示・ページェント)の準備のため、関係者がそれぞれ来室。
- 8月・卒業生に「筑豊の子供を守る会」関係資料提供。
- ・専修大学附属高等学校同窓会の方より、校歌について問合せあり。
- 9月・日本近代音楽館所蔵山田耕筰直筆東洋英和女学校校歌楽譜の写真撮影『120年史』掲載のため。
- ・中目黒教会員より大中寅二関係資料について問合せあり。資料提供。
  - ・120周年記念事業へ写真の貸出:展示部門へ約50点、同窓会〔村岡花子展、冊子制作〕へ約20点、ページェントへ約70点(～11月)
  - ・総務課より追悼記念礼拝について問合せあり。
- 10月・大学図書館の展示企画へ資料(学院創設期の写真数点、『燈火節』)貸出。(～1月)
- ・全国大学史資料協議会全国研究会に史料室2名参加。京都大学大学文書館「歴史展示室」・京都府立総合資料館(資料保存の状況)見学、など。
  - ・講談社出版研究所へ片山廣子の写真提供。
  - ・朝日新聞社より、童謡「赤い靴」のモデル佐野さきみについて問合せあり。
- 11月・『史料室だより』63号(120周年記念号)発行。
- ・外苑東通り研究会へ、許可を得て写真1点提供。
  - ・大学教員より校章の楓について問合せあり。
  - ・大学2学生17名、授業の一環で史料室を見学。
- 12月・公文国際学院社会科教諭来室。永坂孤女院について資料閲覧。(～1月)
- 1月・聖学院広報センターより、中川咲(青楓寮舎監)について問合せあり。
- 2月・聖学院より紹介の執筆者、来室。中川咲に関する書籍刊行のため、資料閲覧。
- ・幼稚園教員2名来室。荒牧富士子元園長に関する資料の閲覧。
- 3月・『史料室だより』64号刊行

### 〔主な寄贈資料〕

- \*『横浜共立学園資料集』／『神奈川大学史資料集』第20集／『学習院125年 1877～2002』／『駒澤大学百二十年』／『自由学園80年小史』／『柳城学院百二十年史』／『中央大学百年史 年表・索引編』／『専修大学125年 1880-2005』／『学院資料』vol.19／『あゆみ』53号／『立教学院史研究』第2号／『大学アーカイヴズ』No31／『松蔭女子学院 資料』第6集／『京都大学大学文書館だより』第7号／『根づいた花ーメリー・D・ジェシーと尚網女学院』／『しなやかに夢を生きる 青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯』
  - \*『同窓會々報昭和十三年追録』／『幸せに溺れず不幸に沈まず』／『村岡花子随筆集 昔の先生たち』／『をみななれば』／『改定版 生きるということ』
  - \*『名古屋西教会五十年史ー最近10年誌ー』／『京都丸太町教会100年史』／『興望館セツルメントと吉見静江』／『北米・カナダ諸教会派遣 婦人宣教師達の足跡1935～1940』
  - \*『燈火節 随筆+小説集』／『漱石文学のモデルたち』／『地図とあらすじで読む聖書』
  - \*山田耕筰直筆楽譜の複写版
- 上記のほか、同窓生・旧教職員またそのご遺族の方々より、古い写真・成績表・教科書など多くの貴重な資料をご寄贈いただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

### 〔主な購入資料〕

- \*『燈火節』・『かっぱのクー』・『竹柏園集』(片山廣子関係)／『現代婦人傳』／『几帳のかけ』／『王子と乞食』
- \*『シュライエルマツハ研究』(石井次郎著)／『あなたたちは「希望」であるーダウン症と生きる』(丹羽淑子著)
- \*『港区史』(上)・(下)／『麻布区史』／『日本婦人問題資料集第10巻 近代婦人問題年表』
- \*Missionary Outlook / Annual Reports(マイクロフィルム)